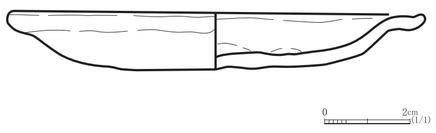
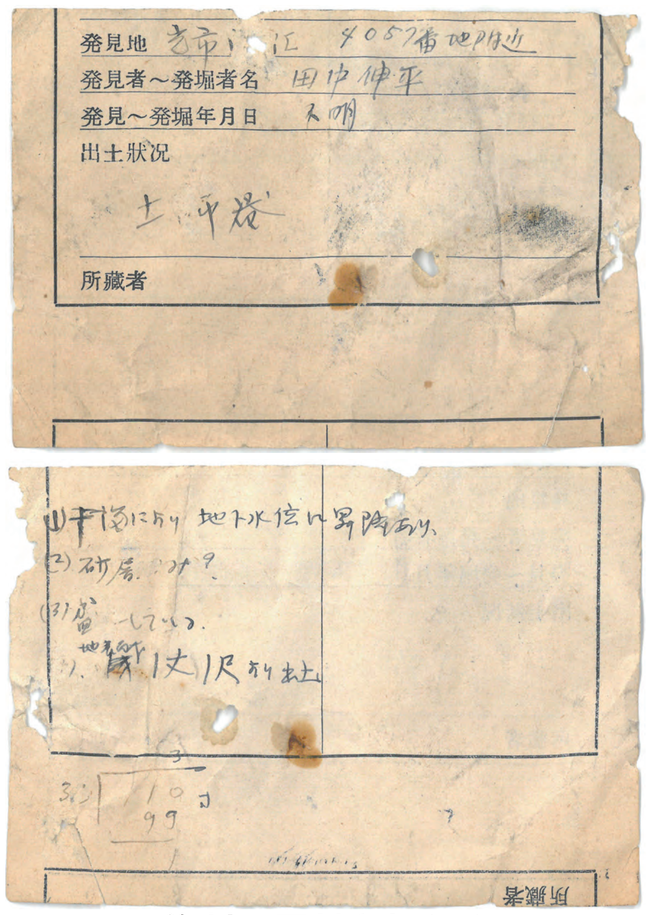
畿内からの搬入品

「て」字状土師器皿



遺物実測図

底部外面注記



資料に同封されたメモ

資料の概要

■資料名：「て」字状口縁土師器皿　　■所属時期：平安時代中期～後期

■出土地：光市浅江 4057 番地付近　　■出土年月日：不明

この小さな土師器には、比較的多くの情報が残されています。底部外面には、

光市浅江　田中義雄氏寄贈　一九五三. 三. 七

と注記されています。この他にも、遺物袋に同封されたメモにも興味深い情報が記入されています。メモの表面には、

発見地　光市浅江　4057 番地付近

発見者～発掘者　田中 伸平

発見～発掘年月日　不明

出土状況　土師器

さらにメモの裏面には、

（1）千□により 地下水位に異□あり

（2）砂層□み？

（3）地表下１丈１尺より出土

これらの情報から、当資料は昭和 28 年（1953）以前に、島田川河口右岸の光市浅江で採取されたことが分かります。採取状況の詳細は読み取れませんが、地下約 3.3mという深い地点から出土していることから、井戸の掘削等工事中に発見されたのかも知れません。

さて、この土師器皿。山口県ではあまり見慣れない形態をしています。実はこの皿は、京都や大坂を中心とする畿内地域で、平安時代中期から後期（10 世紀中頃～ 11 世紀）にかけて用いられていたものです。口縁部の断面形態が「て」字形をしていることから、『「て」字状土師器皿』と呼ばれています。在地の土師器と胎土も異なることから、畿内からの搬入品と見られます。畿内では、宴など「ハレの場」でこの様な土師器皿が大量に用いられ、１度の使用で大量に廃棄されます。島田川河口付近でなぜこの様な土師器が出土するのでしょうか。